

母の 677 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

私の原風景⑩／竹下文子 2

新シリーズ「猫町ふしぎ事件簿」

刊行記念インタビュー／廣嶋玲子 3

こんなときでも、どんなときでも、

ほら、ものがたりがある。／村中李衣、石川えりこ 4

新刊紹介／すとうあさえ 6

まるまるめいた日記⑦／種村有希子 7

イラスト／たかおゆうこ



母の生きる

ねじめ正一

私の母は、父との結婚以来ずっと商店街で店番を続けてきた。

父の趣味が高じて乾物屋から民芸店に転業してからもそれは変わらなかった。品出し、値段付け、ハタキかけ、包装と、どれをとっても何ひとつ手抜きせず、商品を丁寧に愛でるように扱っていた。

民芸店が軌道に乗り始めた矢先のこと、父が脳溢血^{のういつけつ}で倒れた。命はとりとめたものの、父の看病と介護で、母は生き甲斐になっていた店番から離れなくてはならなくなったのだ。

父の努力と母の一念で、奇跡的と言ってもいいほどに父は回復し、杖をつけば家の中をなんとか歩けるまでになった。父が身の回りのことをできるようになると、母は昼間また店番に復帰した。その時の母の喜びようはなかった。家で待っている父のことを忘れているのかと思うほど店番に没頭して、慌てて家に帰って行くこともしょっちゅうであった。「宝箱の中で店番できるなんて、私、幸せ者ね。ねえ、正一、そう思わない？」

私からすれば苦勞ばかりに見えた母は、そう言っていた。

ところが、それから10年後、父が2度目の脳溢血で倒れて寝たきりになり、本格的な介護生活に入った。その間、母自身もヘルニア、子宮筋腫、乳がん^{わづら}を患い、以来、店番をすることができなくなった。それでも時々、店に来ては、お客さんに「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」と声をかけ、商店街の喧噪に身を委ねながら目をつぶり、穏やかに店の奥の椅子に座っていた。ずっと店番を続けてきた一生だった。

その母みどりが、3年前93歳で亡くなった。葬儀の後、私は5歳の孫と一緒に母がやっていた民芸店の前を通った。そのとき、孫がシャッターの郵便受けの小窓に顔をくっつけ、暗闇の店の中を見続けてから言った。

「じいーと見てたら、暗いのにな慣れて、みどりバアバが見えた」

そんな孫とのエピソードから絵本『みどりバアバ』は生まれた。大切な人の死は、決して怖いものではない。残された人の心の中で温かく生き続け、引き継がれていくのだから。

(ねじめ しょういち／作家・詩人)

わたしの原風景

15

竹下文子

たけした ふみこ／童話作家



イラスト／平澤朋子

生まれたのは九州の港町。海峡を見おろす坂の上の家に、父と母、祖母と叔母も一緒に暮らしていた。でもその家の記憶はない。

二歳半のとき、父の転勤で神戸に引っ越した。そしてまもなく弟が生まれた。それまでは、母、祖母、叔母の三人の誰かがいつもそばにいて面倒をみてくれていた。それが一変し、女手は若い母ひとりだけになった。その母も赤ん坊にかりつきりだ。いきなり「もう大きいでしょ、おねえちゃんでしょ」と言われる立場になった。

2DKのアパートで、ベビーベッドを置く場所がなく、母は柳行李やなぎうりに紐をくくりつけて鴨居からぶらさげ、ゆりかご代わりにして、まだ首のすわらない赤ん坊を寝かせていた。

そのゆりかごが、単純にうらやましかった。だけど、もう大きいから、ゆりかごでは寝られない。おねえちゃんだから、お母さんのお手伝いをしなくちゃいけない。

母の手つきを真似て、ゆりかごをそとと押す。前に後ろに、ゆらゆら。もっと押すと、もっと揺れる。もっと。もっと。もっと。

台所から母があわててとんできた。ゆりかごはぶんぶん大揺れに揺れて転覆寸前、中の赤ん坊は、かわいそうに泣き声も出ずにぶるぶる震えていたそつだ。

「そんなに揺らしたいんなら、お外へ行つて、ぶらんこでも揺らしてなさい！」

叱られて、階段を降りて外に出た。よく晴れた真昼。アパートの共用の遊び場には誰もいない。こまかい花崗岩かこうがん混じりの砂が白く光って眩しかった。

ぶらんこを押すと、かすかにきしんで揺れ、やがて止まる。

違う、これじゃない、と思う。ぶらんこじゃない。揺らしたかったんじゃない。そうじゃなくて……。

うまく伝えることのできないもどかしさを抱えて、ぶらんこの前に立っていた。貝が真珠を抱くように、いまでもそれを持っている。

先月、刊行された『猫町ふしぎ事件簿 猫神さまはお怒りです』は、廣嶋玲子さんがおくる新シリーズの第一作。今回は、創作の経緯などをお聞きしました。

——小学四年生の主人公・遠矢は、猫たちが大切にしていた猫じやらしをとってしまいます。それが、猫神さまの怒りを買って、猫の姿にさせられてしまい……。本作は猫にまつわるファンタジーですが、創作のきっかけを教えてください。

せっかくだから、大好きな猫がいっぱい出てくる、ふしぎな物語を書きたい。そう思ったのがきっかけです。そして「猫がいっぱい」というフレーズが、様々な毛がிரまじったような猫神「おまざりさま」のイメージを生み出しました。そのイメージがかたまってきたので、どんどん物語は進み始めました。いろいろな猫を書けるのも、とても楽しかったです。

——本作は、日常と地続きのファンタジー。子どもたちは、「自分たちの毎日にも、こんなことが起こるかも!？」とワクワクした気持ちになりそうですね。

そうですね。私自身が「日常の中にファンタジーが隠れている」という物語が好きなので、読者の皆さんにもそういう世界を楽しんでもらいたいと思っています。この「猫町ふしぎ事件簿」も、猫たちの考え方や生き方、人間とは違うことわりなどを、色々考えて書きました。読者の皆さんに「あ、猫にとってはそうかもー」と、驚いてもらいたいです。たとえば、主人公

新シリーズ「猫町ふしぎ事件簿」 刊行記念インタビュー

廣嶋玲子



廣嶋玲子（ひろしま れいこ）

神奈川県生まれ。2005年、『水妖の森』（2006年、岩崎書店より刊行）がジュニア冒険小説大賞を受賞。作品に「はんびらり!」シリーズ（童心社）「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂」シリーズ（偕成社）「十年屋」シリーズ（静山社）「鬼遊び」シリーズ（小峰書店）など多数ある。



猫町ふしぎ事件簿
猫神さまはお怒りです

廣嶋玲子／作 森野きこり／絵
本体価格 900円＋税

の男の子、遠矢は、「苦労して手にいれたものが、価値のあるものとなる」という猫の考え方に驚きつつ、いいなと感じます。違いを知り、それを認める。それってすてきなことだと思っんです。

——本作にはたくさんの個性的な猫たちが登場しますね。廣嶋さんにとって、猫はどのような存在ですか。

私は以前、サンズという白猫を飼っていました。それまで猫というのは、すごくミステリアスな生き物だと思っていましたが、サンズを飼ってみて、その考えがひっくり返りました。

おトシだし、意外と運動神経がない！臆病なくせに、変なこだわりがあったり。でも、そこがなんとも言えず魅力的で。猫にはまるというのは、こういうところではないかと思っています。

——もしも、猫になったら何をしたいですか。

人間には入れない細い路地、高い場所などを思いきり走ってみたいです。あと、しっぽの感覚を味わってみたいです。動かすと、どんな感じなのか、興味があります。

——最後に、読者の方にメッセージをお願いします。

読者の皆さんには、とにかく楽しんでいただきたいです。自分が住んでいる町にも、じつは猫の世界が広がっているかも。そう思っていただけよう、これからも続きを書いていきたいです。



こんなときでも、 どんなときでも、 ほら、 ものがたりがある。

村中李衣

1958年山口県生まれ。児童文学者。ノートルダム清心女子大学児童学科教授。主な著作に『おねいちゃん』（理論社、野間児童文芸賞）『チャーシューの月』（小峰書店、日本児童文学者協会賞）『あららのはたけ』（偕成社、坪田譲治文学賞）『こくん』（童心社）など多数。

どうにもならない？

これまで当たり前だった時間や空間が、
当たり前でなくなってきた。

熱心に学校での読書活動を進めていた先生方からはため息が漏れる。読書の時間は学習の遅れを取り戻す時間に振り当てられてしまい夏のプールも感染予防のためになくなった。せめて、ランチタイムだけでもゆったりした気分で過ごしてもらいたい。「おしゃべりをしてはダメ」。お楽しみの時間をもぎ取られた子どもたちの元気のなさが教室の中を這うように広がっている……。読書ボランティアの方々も、朝読の時間がカットされたり、密集や飛沫の懸念から動画配信に切り替わったりで直接子どもたちに本の世界を手渡せている実感が無いんだだけ

聞き入ることから始めてみよう

さて、それでは何から始めるの？ ということだが、子どもたちに「耳で聞くお

話の中に身を投じる」経験を重ねてもらうのはどうだろうか。ここで言う「お話」とは昔話やストーリーテリングの素材のような既成のものを指すのではなく、先生や家族や身近な人が語ってくれるちょっとした失敗談や子ども時代のエピソードのようなものをイメージしている。

学校教育が重要視している「聞く力」とは、情報処理能力と結びつき、如何に正確に簡潔に要点を聞き取るかが問われる。見渡せば「事情聴取」「聞き取りテスト」と、日常生活にこれまで求められてきたのは「自分の側に取り込む」ことで、相手の心の中に手放しですまわせてもらう「聞き入る」体験ではなかったように思う。ぼーっと他者の語ってくれるお話の世界に身を浸す時間、これを味わうのに、今はもってこいのチャンスだ。「これまで誰にも内緒にしていたんだけどね、実は子どものころ先生はね」と、悔しかった話やびっくりした出来事なんかを話してみる。そしてこの「ちょっとした耳で聞くお話」に続けて「そういうえばこんな本もあったよ。この本の主人公は先生と違って、秘密の森を見つけた時に……さてどうしたのか、気になったら読んでみるといいよ」というように、イメージが繋がっていく本を紹介したり、逆に「この本にはこんな場面があるんだ

けどね、そういうば母さんにも似たようなことがあったのよ。それはね……」と本を出発点に発想を自由に飛ばして話をしてもいい。子どもたちは、特に感想を求められるでも、話の要約を求められるでもなく、ただただ耳を澄まして、今の時間この場所から解き放たれ、子ども時代のお母さんや、失敗だらけでべそをかいていた先生の傍らにそっとたたずんでいる自分を感じることができるよう。こうした経験を重ねることで、次第に耳がほぐされ、感度のよい受信器に育っていく。そうなれば、次には、先生や家族が架けてくれた本に繋がる橋をこっそり自分で渡ってみたくなる。だから、耳で聞くお話タイムで紹介された本はいつでも図書室で読むことができるように工夫しておけばいい。繰り返すが、家族や先生が架けてくれた読書への橋が、隠れた教育的目論みによるものでなく、子ども側のからの（へえ〜せんせいって、そんな子だったんだ）とか、（かあさんでもそんなことがあったんだ）というような聞き入る体験によって生まれた近しい感情に支えられていることに意味がある。という訳で今月から連載「ホンのちょっとぴり」をスタートさせることになった。どうぞよろしく。

耳で聞く小さなおなはし

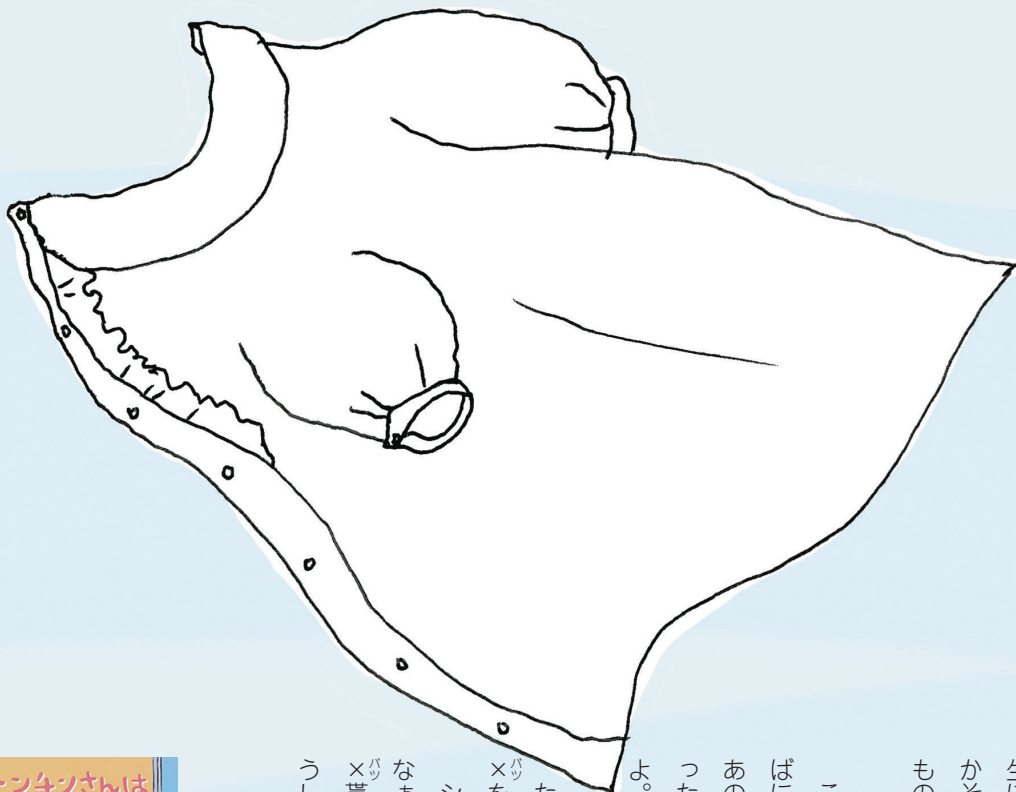
「ホンのちょっぴり」

文・村中李衣 絵・石川えりこ

だめ！

私、小学校二年生の夏にね、大阪の小学校に転校したの。シロイくんっていう体のでっかい男の子がいてね、私が大坂弁をうまく喋れず、走るのもすごく遅かったから、からかってきたんだ。体育が終わって教室で着替えようと思ったら、シロイくんが私のブラウスで泥だらけの足を拭いてたの。にやにや笑いながらね。

あ・あ・あ。昨日の夜、きれいに洗濯してアイロンをかけてくれていたお母さんの姿が浮かんで、お母さんのほっぺたに泥がつばいついちゃった……。夢中でシロイくんの背中に飛びついた。ビリビリッて音がして、シロイくんのシャツの背中がびろろんと垂れた。何が起きたかわからずにボカンとしているシロイくんに向かって私、「だめ！」って言った。シロイくん、それを聞いてうおーん、って泣いた。私は泣かな



かった。後で「やられたらやりかえすなんてあきません！」って先生に叱られたけど、やりかえすとかそんなんじゃないもん。ダメなものはダメなんだ。

このあいだ『トンチンさんはそばにいる』っていう本を読んで、あのブラウスのこと思い出した。胸がぎゅゅって痛くなったよ。主人公のひなたちゃんも、ゆうくんのために、意地悪した石川くんのプリントに大きな×を書いたんだっけ。

シロイくん、今頃どうしてるかなあ。そして、ひなたちゃんから×貰った石川くんも、あれからどうしてるのかなあ。



トンチンさんはそばにいる
さえぐさひろこ・作
ほりかわりまこ・絵

毎年、園では季節ごとにさまざまな行事を計画します。しかし今年は新型コロナウイルスの感染予防のために各園、行事を中止または延期せざるを得ない状況となってしまいました。

そんななか届いたのが、紙芝居「はる・なつ・あき・ふゆ たのしい園生活」(全6作)です。内容は、春の「身体測定」、夏の「プール遊び」「夏祭り」、秋の「遠足」「運動会」、冬の「大掃除」。ご紹介しましょう。

『おばけのしんたいそくてい』では、ばけばけえんで1番大きいぬりかべのぬーくんの測定方法をみんなで考えます。それがとてもユニークなんです。数字では測れない“心の優しさ”も伝わってきます。

『ちいさいプールのチャプン』のチャプンはけんちゃんと遊びたいけど、けんちゃんは水が苦手。そんな2人の仲を取りもつのが、なんとカブトムシ。仲良くなる初めの1歩は、お水を指でツンツンすることなんですって。なるほど。これなら水が苦手な人たちも、プールが好きになれそうですね。

『こんやはなつまつり』では、あらあら、たぬきときつねが、歌にさそわれて踊りだし、ミミちゃんたちのたこ焼きまでちゃっかりもらってしまいます。盆踊りの音や歌、たこ焼きの味、花火の色彩、つないだ手の感触。子どもたちに五感で感じてほしい日本の夏が詰まっている作品です。

『きつねのえんそく』では、子どもたちが山に遠足に行くと、きつねの子が「手伝ってあげよう」とこっそり落ち葉をはらったり、どんぐりを落としてあげたり。観客はきっと「きつねもみんなと遠足でできればいいのに」と思うことでしょう。大丈夫。その願いは叶います。

『どんぐりのうんどうかい』のどんぐりたちは、踊って、落ち葉登りをして、どんぐり列車で走ります。わあ、帽子が飛んで誰のかわからなくなっちゃった。遊びの延長のような運動会、いいなあ。子どもたちもきっと、どんぐりたちのように走りたくなくて、うずうずしてきますよ。

最後は1年の終わりの『おそうじ おそうじ おおそうじ』。園のお部屋をみんなでお掃除していたら、ビー玉やメダルなど宝物が出てきました。きれいになったお部屋には、なんと……「お正月さま」が来てくれました！ 私も切に願いたい。来年が普通のいい年になりますように、と。

秋から、さらに深い秋へと、季節はいつものように移り変わっていきませんが、園生活はいつものようにとはいきません。それでも先生たちは子どもたちに心に残る豊かな体験をさせてあげたいと日々知恵を絞っています。

この6作の紙芝居を演じてみて、私たちには園生活を豊かにしてくれる「季節」というすばらしい味方がいる……と、しみじみ感じました。

今年度の園行事は例年と違う形になってても、季節を楽しむ、ということに変わりはありません。その楽しさを、紙芝居を通して子どもたちに伝えたいと思います。なんととっても、こどもたちは紙芝居が大好きですから。

(須藤麻江／童話作家、駒場けやき学園駒場幼稚園理事長)

季節とともに、豊かな園生活を

すとう あさえ

はる・なつ・あき・ふゆ たのしい園生活 (全6巻)

セット価格 10400 円+税

12 場面 本体価格各 1900 円+税

8 場面 本体価格各 1400 円+税



おばけのしんたいそくてい

刈田澄子／脚本

長谷川知子／絵

12 場面



ちいさいプールのチャプン

津田真一／脚本

はやしやすみ／絵

12 場面



こんやはなつまつり

かわしまえつこ／脚本

松成真理子／絵

12 場面



きつねのえんそく

はせがわさとみ／脚本

市居みか／絵

12 場面



どんぐりのうんどうかい

あべしまこ／脚本

夏目尚吾／絵

8 場面



おそうじ おそうじ おおそうじ

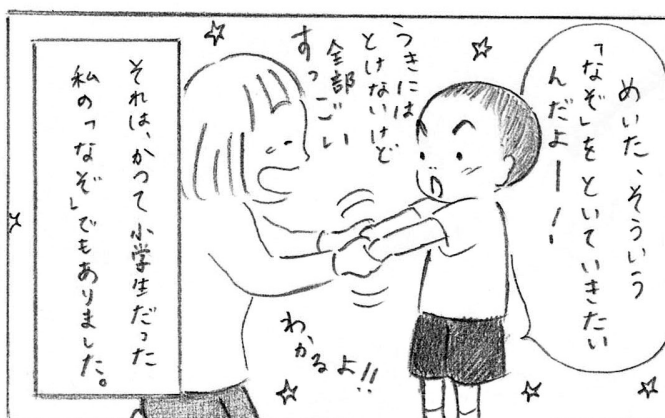
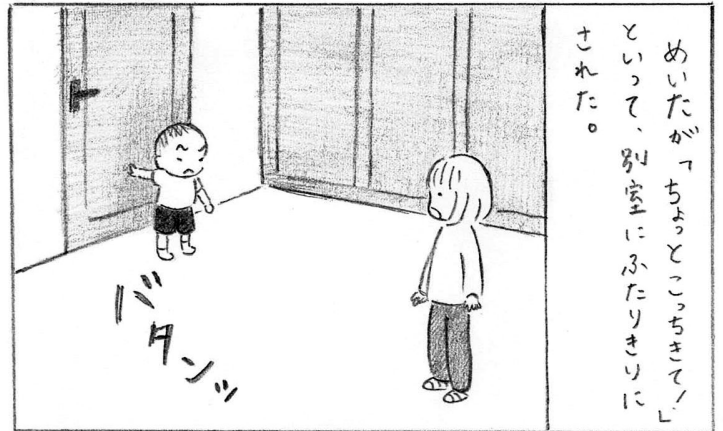
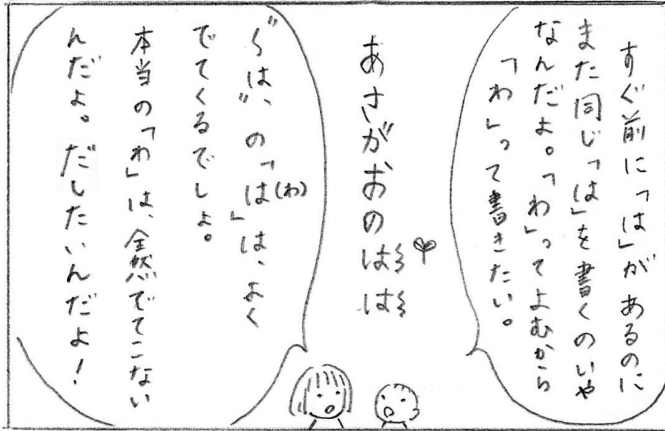
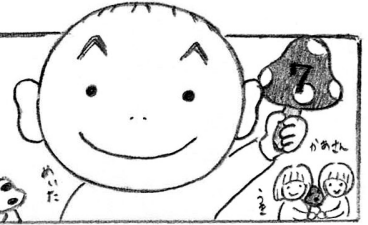
すとうあさえ／脚本

くすはら順子／絵

8 場面

まるまるめいた日記

種村 有希子



10月の新刊図書！

せとうちたいこさん

せとうちたいこさん ふじさんのぼりタイ

長野ヒデ子／さく

本体価格 1300円＋税



「♪ノミがリュックしょってふじとさん」の歌を
きいて、ふじさんにのぼりたくなったタイのせと
うちたいこさんは……。

クローバーと魔法動物

②魔法より大切なもの

ケイリー・ジョージ／作

久保陽子／訳

スカイエマ／絵

本体価格 1200円＋税



魔法動物紹介所ではたらく人間の女の子、クロー
バー。オーナーのジャムズさんがいないのに、魔
法動物の卵がかえってしまい……。

童心社のおはなしえほん

みどりバアバ

ねじめ正一／作

下田昌克／絵

本体価格 1400円＋税



花屋の店番が大好きだったみどりバアバがしんだ。
こうくんは涙が出てきたけれど……。バアバと向
き合う男の子の気持ちを丁寧に描く。

猫町ふしぎ事件簿

①猫神さまはお怒りです

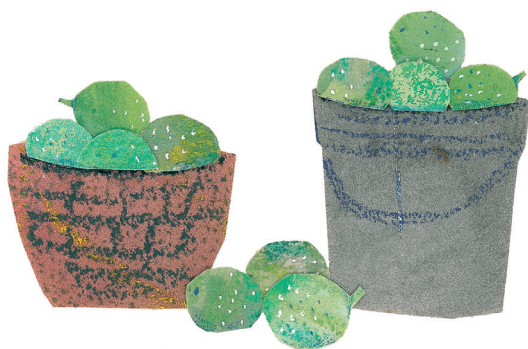
廣嶋玲子／作

森野きこり／絵

本体価格 900円＋税



ある日、遠矢は真理恵のたのみをことわれず、猫
が鳴きかけるふしぎな猫じゃらしをとってしまう。
その夜、家にまっ黒な猫が……。



イラスト／たかおゆうこ

読者の声

14ひきのシリーズ
14ひきのあきまつり

いむらかずお／さく
本体価格 1200円＋税



14ひきの愛らしい動きや、細かな風景にひき込
まれています。ストーリーの意外性も大好きで、
子どもよりも私が喜んで読んでいます。息子は
一歳をむかえてすぐに山の幼稚園に通いはじめ、
絵本で見る世界を実際に体験することが多く、ま
す「14ひきのシリーズ」にはまっています。14
ひきの名前もしっかり覚えしました。

(奈良県 Y・C 四二歳)

2020年10月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第677号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただきます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●日本では、10歳～39歳までの死
因1位は自殺だそうです。40代で2
位、50代でも3位とのこと。こんな
国が他にあるのでしょうか？ コロナ
禍による孤立、経済的ダメージの影
響も心配です。自分という存在のか
けがえのなさを意識し、がんがん愚
痴を言いましょ。大切な人たちは
遠慮会釈なく連絡を取り合いましょ
う。自助ではなく互助の精神で。 ①

●先日、小川洋子さんがパーソナリ
ティを務めるラジオ番組で『14ひき
のひっこし』が取り上げられました。
30分かけて絵本の隅から隅までを堪
能する至極贅沢な紹介に、子どもの
頃の絵本体験を思い出しました。じ
っくりと絵を見つめて中に入り込んで
いき、次第に音まで聞こえてくる……
いつもそんな風に腰を据えて絵本と
向き合うことを心めたいです。 ②